

蛻変する全カリ言語教育

谷野 典之

全学共通カリキュラム（以下、全カリ）の言語教育は、その実施から11年目となった今年、大きな転換点を迎えることとなった。それは単なる制度改訂という範囲を越えて、蟬が殻を脱ぎ、蝶が羽化するような変化を予感させる。

そもそもの発端は、2008年4月に本学で10番目の学部として異文化コミュニケーション学部が発足することに起因する。これによって、これまで学内の8つの学部に分属していた言語科目担当教員がこの新学部を集結することになったのである。これは結果としてこの新学部が全カリの言語教育を支える主体となるという構造変化をもたらした。これまで言語科目担当教員はそれぞれの言語教育研究室に所属し、その各研究室主任計6名が言語構想小委員会の委員となることで、全カリ教育の運営に参加してきた。しかし言語科目担当教員は、言語構想小委員会の上部組織としての全カリ運営センター委員会のメンバーにはなっておらず、いわば間接的にしか全カリ運営にタッチしてこなかった。こうした運営体制は、言語科目を全学的なコントロールのもとに置くと同時に、言語科目の運営に全学部が積極的に関与していこうという強い意志の現れであった。そして11年が経過した。

言語科目担当教員が集結する新学部の発足によって、全カリ言語教育は新しい足場を得ることになった。2008年4月からは、これまで各学部代表委員と言語教育研究室主任によって構成されてきた言語構想小委員会から学部代表委員がいなくなり、上部組織である全カリ運営センター委員会に言語教育研究室主任2名が加わる。つまりこれまでとは逆に、全学部は間接的に言語科目の運営に関わり、言語担当教員の代表は直接全カリ運営に参加していくのである。

さらに全カリ言語科目は2010年に大幅なカリキュラム改訂を予定しつつある。その一部が、来年度から実施に移される言語科目のインテンシブコース（副専攻）制度である。自由選択科目を履修レベルごとにデザインすることで、言語学習をシステム化し、学習の達成目標を明確にしている。また今年度からは、インターネットを利用した英語の新しい自習システム Rikkyo English Online もスタートした。

脱皮することによって姿は変わる。しかし姿は変わってもその本質は変化しない。それを「蛻変（ぜいへん）」と謂う。卵が幼虫に、幼虫がさなぎに、さなぎが成虫になるように、全カリ言語教育は成長を続けていくのである。

たにの のりゆき（本学経済学部教授、言語教育科目担当部長）